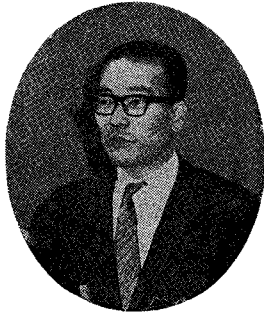


建設と人間* / 「戦艦武蔵」 「高熱隧道」を書いて

吉 村 昭**



私は昨年「戦艦武蔵」という小説を書きましたが、その4分の3以上は造船技師の話です。それから今年はまだ黒部第3発電所の隧道工事を取材しまして、「高熱隧道」という作品を書いたものですから、講演の依頼に見えた東北電力の方も、私が技術に強い人間だと思われたのでしょうかけれども、これは大変な誤解です(笑)。強いどころか、停電になってもヒューズを取り換えるのは女房です(笑)。昨年の暮に2階に書斎をつくったときも、設計図ではいくら説明されても、ちっともわからない。女房はぼくがとぼけているのだと思っている(笑)。そんなわけですから皆さんのご参考になるような話しはとでもできないことを初めにお断りしておきたいと思います。

巨艦「武蔵」

私は武蔵の建造日誌を最初見ましたときに、やはりその中に当時の戦時中のあの熱っぽい空気というもののがはっきり出ていると思いました。それでこれを書こうと思ったのですが、とにかく技術にはまるで弱い人間ですから、一体どんなものが書けるか非常に不安で、ともかくやってみようと、造船技師のところへ行きましたら、あなたこれを書くのには10年かかりますよと言われた(笑)。

この戦艦「武蔵」「大和」というのは、戦時中に日本の技術者がつくった「零戦」とともに、これが兵器であるということがきわめて残念なんですけれども、やはり大傑作の一つだろうと思うのです。「武蔵」は7万トンで

越す巨艦ですけれども、その当時の戦艦は一般には4万トンぐらいだったので、ちょっと想像もできない大きかったです。どれくらい大きいかといいますと、はっきりした数字をいま持ち合わせてはいませんが、艦の中部あたりから艦橋の上まで13階のエレベーターでつながっている。乗組員は約2500人ですけれども、そのほかに10000名の兵隊とトラック数百台を載せて運んだこともあるというように、とにかくきわめて大きな艦でして、完成してから中を点検するときも、水兵が朝弁当を持って入ると、一つ一つの部屋を見てまわって出てくるのは夕方になっちゃう。工事中なんかでも、中に入って行方不明になっちゃった人さえる(笑)。だから白墨でずっと印をつけて行って、戻りにはそれをたどって帰ってくる。ほんとうに夢のような話しなんです。

こんな大きな戦艦をどうして造ったかといいますと、そのころの戦艦というのは、大体主砲を撃ちますと3万メートルぐらいとどくのです。ところが「武蔵」「大和」の主砲は45センチという大きな口径のもので、42000メートルも届くのです。だから、海戦になると敵の方がまだ撃っても届かないうちに、こちらは42000メートルあたりで全部たたいてしまう。そういう構想のもとに建造されたわけです。

「大和」の方は呉の海軍工廠の中で造りましたから、あまり問題はなかったのですが、「武蔵」の方は長崎で、すりばちの底みたいな所に造船所があって、まわりの丘にずっと人家が並んでいる。しかも外国の領事館などもあって、外人も沢山住んでいる。そんな所で造るのですから、機密保持には大変な神経を使ったようで、ご存知の方もいるでしょうが、「しゅろなわ」のすだれですっぽり船をかくして造ったわけです。それから進水のときがまた大変で、外人の家は全部警官とか憲兵が訪問して、その間中長々としゃべって外に出さない。一般の家は全部窓を締めさせてしまって外を歩かせない。海岸線には10メートルおきにずっと警官と憲兵がならんで警戒する。船の方には長い竿みたいなものを出して、それにまたしゅろなわのすだれをたらしつけてしゃへいするといった具合なのです。

* 本文は、昭和42年11月10日土木学会東北支部設立30周年記念式典に際して行なわれた記念講演会講演のうち吉村氏の講演速記録から抄録したものである。

** 作家、昭和41年度太宰治賞受賞。著書に「戦艦武蔵」「高熱隧道」等がある。カット写真は、宮城県民会館で講演する吉村氏。

船の進水というのは、太いレールみたいな滑走台というものを置いて、それまで船を支えていたものを少しずつ外して、これにだんだん重量をかけていって滑らせるわけですが、とにかくその進水重量では、現在でもその世界記録が破れていないという重い船ですから、無事に進出させるまでには大変な苦勞があったのです。さて、いよいよ進水したところが、こんな巨大な船が水の中に滑りこんだものですから、長崎湾に1メートルから1.5メートルぐらいの高波が起こって、海岸の近くの家は畳の上まで波が入り込んできた。家に閉じこめられていた人々は津波じゃないかと、気象台なんどもずいぶん問い合わせがあったそうです。

いよいよ艤装も終わって海軍に引き渡されることになって、工員さんや技師がタラップを踏んで下のボートに移るときに、みんな艦体をなで泣きながら下りて行ったということです。この建造に当たった技師、工員たちと「武蔵」とは、それが最後の別れになってしまったわけですが、何か私が取材中に感じたことは、この人達は兵器を造ったのではなくて、いい船を造ったんだと考えているのだと思うようになりました。

大宮文吉というそのときの進水主任が現在もお元気ですが、この方は工業学校を出ただけの方なんですけれども、その方の顔を見ておきますと、熱っぽい口調で、「武蔵」の話をする顔が実に美しい。「武蔵」を造るだけでその人の人生はすべて終わったし、それだけでもこの人の人間的な価値は十分あるんじゃないかと思いました。

「高熱隧道」を取材して

さて「高熱隧道」の話なんですけれども、私が土木にいくぶんでも興味を持つきっかけになったのは、女房の従兄が佐藤工業におりまして、小町谷武司（注：本会会員）という男ですが、黒四のときには越冬隊長をやったりしていました。その男からいろいろ話を聞いているときに、トンネルというものは、こっちから掘って行ったのと、あべこべのほうから掘ってきたのが、大体10センチかそこらしか食い違わない。そんな馬鹿なことはないだろう（笑）。いやそういうふうになるんだよ……。というわけで大変驚いたのです。それから、あるダムを造るときに、人家はないはずの川上からおわんが流れてきた。そこでさぐってみたところが、人家はないはずの場所なのに、その川上に20人ぐらいの部落があった。おそらく平家の落武者の部落だったんだらうという話をちょっと聞いたのです。これは小説になるなと思いました。さっそくいろいろ構想を立てて、その従兄のいる黒部

の第四発電所へ行ったわけなんです。

宇奈月から軌道車に乗りまして、樺平へ入って、立坑を190何メートルだか上りました。その終点で今度は妙な箱に乗せられた。大きな棺おけか風呂みたいな密閉された箱車なのです。ガラス窓がはまっているのですけれども、変なものに乗せるなどと思っていましたところが、動き出してしばらくすると、体が温かくなってきて。そのうち、その温度が段々ひどくなってきて、ひょっと見ると、ガラス窓の外が湯気でいっぱいになっているし、とびらの間からも湯気が入ってくる。これは火山の爆発か何か天変地異が起ったんじゃないかと恐怖を覚えたのですが、いっしょにいる工夫の人達を見るとみんな頭を下げてじっとこらえているので、ああこれが普通の状態なのかと思ったのですけれども、とにかく大変な熱さで向うへ出たときにはほんとにほっとしました。

迎えに出てくれていた従兄に「あの熱さは何だ」と聞くと

「高熱隧道というのだ」という答が返ってきました。

そのころちょうど大町トンネルをやっていたので、その中にも入れてもらったのですけれども、切羽の所に立っていると、後から何だか知らないが京都の山車みたいなものがガンガンとすさまじい音を立てて入ってくるのです。いま考えるとドリルジャンボというやつだと思うのですけれども、私の体は動かなくなってしまった。他の人夫の方達はスイスイとうまく逃げるのですけれども、僕はどうも体がこわばっちゃって、そのままっ立っていましたら、従兄が慌ててやってきて手を引っぱってくれたから助かったのですが、私の神経なんかじゃ土木技師はとうていやれない。やはり土木というものは、自然を相手にしているのです、普通と違うんだなということをつくづく感じた。それを「高熱隧道」の中で何とか表現したいと思ったのです。

高熱隧道というのは、そこに温泉脈が通っていて、湯熱層を貫通させた隧道なのですが、工事前にいろいろな推測が行なわれたらしいのですけれども、どうもはっきりしていなかった。黒部第三発電所のために上流の仙人谷にダムを造ったわけですが、樺平から仙人谷まで掘った水路と資材運搬用の軌道隧道のうち、第一工区の阿曾原谷で、30メートルぐらい掘ったところ、岩盤が65度ぐらいになってしまった。学者たちは90度ぐらいまで上った後は、それは降下するというのに、ついに100度を突破して寒暖計が割れてしまった。ダイナマイトを装填しているときに、自然発火も起って十数人が吹き飛ばすというような事故も起った。

非常な熱さなものですから、川の水を揚げてホースで後から人夫の背中にかけるわけです。かけてる人も熱いから、またそれを後からかける（笑）。最後にはとうとう162度までいってしまうのですが、こんなふうに水をかけるので、腰まで水につかるような状態になったが、それも水ではなくて、42.3度ぐらいのお湯になっている。ですから20分おき交代でやる。非常に苦勞をしたわけです。

さらに、あわなだれで、志合谷に建てた5階建の鉄骨の宿舎が五百数十メートルもふっ飛ばされて大岩壁にたたきつけられるというような大変な事故も起っている。このあわなだれというのは何かといいますと、ある種のなだれが発生するとき、マッハ3、秒速1000メートルぐらいの旋風を起すといわれている。オーストリアなどでは、これで一つの村がどこかへ飛んで行っちゃったことさえある。志合谷のときは最初は裏山の雪が大分なだれていたの、その下に埋っていると思って2~3ヵ月も掘ったらしいのですが、何も出てこない。結局、その後5階建のビルと100名に近い人間が、小さな山を一つ飛び越えて五百数十メートルも空を飛んで岩壁にたたきつけられていたことがわかったのです。さらにその後阿曾原の宿舎もやはりあわなだれに合って、裏山にあった樹令何百年という大木がみな空に舞いまして、その宿舎に突きささってしまって、多くの人々が死んだ。

志合谷の事故のときは、佐藤工業のリーダーで今村常吉さんという人がいるのですが、奥さんの所へ「全責任はおれにあるんだ。おれもこじきになるから、おまえもこじきになる用意をしておけ」というような手紙を出したそうです。今村さんは責任を負って自殺するのじゃないかと皆心配したそうですが、私は「高熱隧道」の中で、この人が現場妻というような変な女を連れて歩いているように書いてあった（笑）。この間会いましたら、君の小説は、あすだけは事実と違っていただけども、あれは小説としてはおもしろいといって、おれもああいうのが欲しかったな（笑）なんていって笑っておられました。

高熱隧道は当時の記録映画がありますが、これは私が全部書き終ってから関西電力の倉庫から出てきたんだそうですが、非常に貴重なフィルムで、何かの折に是非見ていただきたいと思うのです。

いま私が書いています「零式戦闘機」のことで、この小説は試作機が2台の牛車に乗せられて運ばれる場面から始まるのです。三菱名古屋航空機製作所で作った試作機を、48キロメートル離れた各務ヶ原飛行場まで

運んでいって、そこから飛ばすのですけれども、驚いたことに途中の道というのが非常にでこぼこ道でして狭いのです。トラックで運ぶとガタガタゆれて機体が皆傷んでしょう。牛車だとノロノロ行きますから傷まない。そういう理屈で、戦争が終るまでずっと飛行機は牛車で運んでいる（笑）。土木学会の方から考えると、とてもおかしい話だと思うのですけれども、なぜ最初に通路をつくらぬか。道を良くすればトラックでどンドン運べたのに牛でずっと引っぱって行くのですからこういうことから考えてみても、やはり日本は戦争に負けるようになってきた国だと思うのです。

すばらしい技術者の生涯

最後にお話したいと思うのは、「戦艦武蔵」「高熱隧道」そして今度の「零式戦闘機」と書いてきて、これらをつくった技師というものに共通した点というのは、全精力を使って一つの仕事をなしたげたのだということです。

私はプロボクサーというのが好きですが、ボクサーというのは、3年もやるとおしゃかになってしまう。頭を打たれますと、脳の神経が切れたり、また目を打たれると網膜剝離を起して物が二重に見えるようになったりする。頭がばかになっているボクサーというのはずい分いるのです。しかしそうになったからその人人のこの世に生れた意義はないかといいますと、決してそうではないと思うのです。彼はいづれにしても、3年間は体力のぎりぎりの限界まで自己を生きた。つまり、わずか3年間の間ではあるが、その人の人生はすべてそこに凝集されているんじゃないかと思うのです。

高熱隧道を造った技師も、武蔵を造った技師も、零戦を造った技師も、みんなそれを造った期間に、自分の全生涯というものが凝集されている。そういう仕事を持つことができた人が一番幸せではないかと思うのです。

しかし、これら三つのものの中で現在残っているのは何かというと、高熱隧道しかないのです。武蔵は20本の魚雷を食い、多くの爆弾を受けて、いまはフィリピンの近くの海底に沈んでしまっているわけです。零戦も全部特攻機になってしまって、わずかにグアム島に残っていた1機が返還されましたけれども、これも三菱の人の話によりますと、いろいろな機材が違って完全な復元はできない。戦艦武蔵にしろ零戦にしろいまあっても、現代の社会に何の貢献も意味もないものですが、しかし高熱隧道というのは、重要な価値をもっている。やはりこういう点で戦争というのは空しいんじゃない

いか。兵器を造った技師と隧道を造った技師との差というものは、そこにあるのではないかと思います。

しかし、それにしても戦争は武蔵というものを造り、武蔵は沈みましたが、いまの日本の造船技術は世界一で、やはり武蔵や大和を造った技術がそういう形で残っているということはたしかです。それから皮肉なことに、太平洋戦争はレーダーで負けたといわれますけれども、日本には完成されたレーダーがなかったものだから、測距儀とか望遠鏡とかが発達した。それがいままた日本の高度なカメラ技術につながってきている。零戦なんかにしても、YS-11というかなり優秀な旅客機を作り出す基礎となって、その技術は何らかの形で残

されているのではないかと思います。

芸術家なんというのは、自分の死んだ後まで残るような作品を生むことはなかなかむずかしい。商人の方にしても、その方がなくなれば、その家業はつながっていても、物としては何も残らない。ところが土木関係の技術者というのは、自分のつくったものが、その人の死後もそのまま地上に残っていくという点で非常にうらやましい存在だと思ふのです。あまり技術がうまくない人でも、技術のうまくないままに……(笑)。そういう点だけでも、もって瞑すべしじゃないかと思うのです。

大変まとまりのない話になってしまつて申し訳ないのですが、この辺で終らせていただきます。

日本の土木技術 —100年の発展のあゆみ—

日本の今日における輝かしい土木技術発展の蔭には、明治初期から約100年にわたる多くの先輩方の努力を見逃してはなりません。本書は従来あまり見られなかった土木技術史の領域に目を向け、現在を力強く支えている数々の貴重な業績を新しい体系で追ったきわめてユニークな書籍です。

若い技術者とくに、これから土木工学の真髄をきわめようとする学生諸君、建設会社に就職された新入社員に、土木とは何か、そしてなすべき仕事は何だろうか、という問題意識を高める上に貴重な書籍ですので学校、会社等でまとめて購入されるようおすすめします。

体 裁：A5判 488ページ 上製箱入美本

定 価：1200円

送 料：150円

新 刊

最新土木工学演習集成 第12巻・第7回配本

発電水力演習

電力中研 工博 千秋信一 著
A5判 424頁 1,500円

主要目次

- 第1章 総 論 第2章 発電計画
第3章 有効落差 第4章 水路の設計
第5章 水路工作物の設計
第6章 サージタンクの設計
第7章 水圧管の設計

既 刊

測量学演習(1) 中央大 工博 春日屋伸昌著
A5判 392頁 1,300円

構造力学演習 東京大 工博 久保慶三郎著
A5判 268頁 1,000円

橋梁工学演習 早稲田大 堀井健一郎著
A5判 328頁 1,200円

道路工学演習 土木研 工博 伊吹山四郎著
A5判 410頁 1,400円

港湾工学演習 日本大 工博 小川 元著
A5判 412頁 1,400円

上下水道工学演習 中央大 工博 内藤幸穂著
A5判 280頁 1,200円

近 刊 水理学演習(1) 北海道大 工博 岸 力著
A5判 306頁 1,100円

東京都文京区小石川3-1-3(伝通院ビル)
振替口座 東京13152 電話(813)7362・3

株式会社 学 献 社